

---

# 屠殺

紀ノ川

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

屠殺

### 【Nコード】

N1371M

### 【作者名】

紀ノ川

### 【あらすじ】

突然喋りだした猫に、少女を殺すように命令された、無職ニート  
中年おやじの運命は？！

## 第1章 母の思い出

### 【目次】

第1章 母の思い出

第2章 12月11日

第3章 12月12日

第4章 12月13日

第5章 12月14日

第6章 地獄の番犬

### 【本文】

#### 第1章 母の思い出

少女は小さな村に住んでいた。山の中の小さな村だ。

ある日少女はその青年を見つけた。雪の降り積もる季節だった。

青年は雪かきをしていた。少女の隣の家だった。小さな村では当たり前前の事だが少女は青年に挨拶をした。

「こんにちは」

青年も挨拶を返した。

「こんにちは」

少女が居間の炬燵で農協が毎月届けてくれる婦人雑誌を讀んでい

ると、台所から家族がその青年についての噂話をしているのが聞こえた。

青年は都会からやって来て、この冬を親戚である少女の隣の家で過ごすという。

それから少女は毎日学校から帰ると、青年の家に遊びに行った。雪の中を子犬の様に転がり駆けて。

少女の目には青年は毎日日本ばかり読んで勉強をしている様に見えるた。

少女は青年と何を話したのか……

雪の様に降り積もる時間の中に記憶は埋もれてしまいもう何も思い出せない。

そんなある日突然青年は姿を消した。

少女は何も問わなかった。青年の家族にも、自分の家族にも。

少女の家族もその青年の話はしなかった。

そして冬が終わり春になった。

少女は初潮を迎えた。

(次章に続く 最終更新日11年07月11日)

## 第2章 12月11日

「吾輩は神であるだニャン」

そう言つと猫は立ち上がり、2本足で歩きながら僕の万年床の枕元にある煙草とライターを手にした。

その猫は僕が学生の頃から飼われていた、もう20年以上生きている年寄り猫だ。

「20年生きた猫は人間の言葉を喋り出す」という言い伝えは本当だった。

「20年生きた猫は化け猫になる」という言い伝えだったろうか？  
とにかく猫は喋り出した。

猫は机に腰を掛けると足を組んで煙草を1本抜き出し、慣れた手付きでライターを使って火を付けた。そして美味そうに煙草の煙をふっふと天井に向けて吐き出した。

「神である吾輩がお前に命令するだニャン！12月14日にお前がいつもウォーキングをしている公園で少女を殺せたニャン！」

デッサン用の石膏像より深い沈黙が訪れた。

猫は溜息をつく、「馬鹿なお前にも分かり易い様に順番に説明してやるからしつかり聞けよだニャン！質問は説明が終わってから受け付けるからなだニャン。その前にそのポカーンと開けた口を閉じるだニャン」と言った。

机の上で尻尾だけが猫の意思とは関係なく、猫とは別の生き物の様にパタリパタリ、ピクリピクリと動いていた。

「？ 今年の夏少女は公園で出会ったお前に一目惚れしただニヤン。だがお前はそんな少女に気付かなかっただニヤン。それが少女の失恋だニヤン」

「？ そして秋になってから吾輩達が屠殺と呼んでいる現象がはじまっただニヤン。老若男女を問わぬ無差別殺人だニヤン」

「？ 犯人は少女の無意識だニヤン」

「？ お前は少女を殺して屠殺を止めなくてはならないだニヤン。少女は12月14日に公園に現れるからそこで殺すだニヤン」

「以上、質問はあるかだニヤン？その前にそのポカーンと開けた口を閉じろだニヤン。よだれが垂れるぞだニヤン」

猫は煙草の煙をふっーと天井に向けて吐き出した。

僕は何か喋らないとまずいような不安な気持ちになって、猫の言う「質問」をした。

「？の屠殺だけど、貞子みたいに心臓発作で殺すのかい？」

貞子って知ってるかい？と訊こうとしたが猫は構わずに喋りだした。

「屠殺とはある日突然、頭のとっぺんから足の爪先までが内側から一度に爆発するんだニヤン。その現場はそりゃひどいもんだニヤン。人間がこれまで目にした事のない光景だニヤン」

「それはジェイソンやフレディみたいな奴がそんな事をするのかい？」

ジェイソンやフレディって知ってるかい？と訊こうとしたが猫は構わずに喋りだした。

「いや、実体はないだニヤン。屠殺という現象だけが起きるだニヤン」

「秋になってからという事だけど……その屠殺という現象が起きているという証拠はあるのかい？」

猫は机の上のペンスタンドからボールペンを抜き出すと、そこら

に散らばっていた紙にサラサラと何かを書き込んだ。そしてその紙を僕に手渡した。そこには3人の名前と日付と住所が書かれていた。達筆だ。猫の癖に僕よりはるかに字が上手い。

「嘘だと思っただけならその情報をインターネットで検索してみるだニヤン。9月、10月、11月と毎月1人ずつ屠殺が発生しているだニヤン。老若男女を問わぬ無差別殺人だニヤン。勿論、ある日突然頭のとっぺんから足の爪先までが内側から一度に爆発しました！なんてインターネットに載っているわけじゃないぞだニヤン。ともかくだニヤン！12月の屠殺は何としてでも食い止めなければならぬだニヤン！その前にそのポカーンと開けた口を閉じるだニヤン。よだれが垂れてるぞだニヤン」

僕の知らない名前に、僕が行った事のない土地の住所。そこにはインターネットで検索する必要はないなと思わせる神懸かり的な説得力があった。この猫の言っている事は本当だ。

「じゃ、？だけど、犯人は少女の無意識ってどういう意味だい？」  
「屠殺は少女が生きてゆく為に、少女の無意識が産み出した方法だニヤン。そうする事でしか少女はお前への失恋を乗り越えて生きてゆけないんだニヤン」

僕は流石に啞然とした。

「……その女の子は心に何か問題を抱えていたのかい？学校でいじめられているとか両親が離婚したとか？」

「全く普通の少女だニヤン。両親に愛され、友達と仲良くし、12才の誕生日に買ってもらった子犬を大切にしている心優しい少女だニヤン。虫愛でる少女だニヤン。今日まで吾輩をいじめてばかりいたお前とは正反対だニヤン」

「12才？少女って12才なのかい？」

僕は少女と言われて、てっきり女子高生かと思っていたのだ。

「そうだニヤン。何か文句があるかだニヤン？」

僕はごくりと生唾を飲み込んで、

「そんな12才の女の子が、何故屠殺なんてホラー映画みたいなグロテスクなものを産み出すんだい？」

「少女の内界を表しているだニャン」

「ないかい？」

「少女の心の世界だニャン。お前に12才の少女の心は理解出来ないだニャン」

猫は大きなあくびをした。

「その女の子は自分が屠殺の原因だって知らないのかい？」

「知らないだニャン。屠殺の原因は少女の無意識だニャン。少女は残り少なくなつた小学校生活を毎日楽しんでいるだニャン」

「で、？だけど、何故僕が女の子を殺さなきゃならないんだい？」

僕は「殺す」という言葉を口にして、頭を殴られた様な衝撃を受けた。

「少女を失恋に追い込んだお前が責任を取るのは当たり前だニャン」  
「女の子を殺したとしてその後僕はどうなるんだい？」

「警察に捕まり死刑か無期懲役だニャン。吾輩の事を話しても刑務所の中の精神病棟のベットに縛り付けられるだけだニャン」

僕は頭を蹴られた様な衝撃を受けた。

僕自身でも猫と話をしているなんて信じられないのに、僕以外の誰が信じるだろうか？

僕はヤケクソになって叫ぶ。「他に方法はないのかい?!」

猫は冷たくハッキリと言う。「ないだニャン」

「……女の子を殺したら本当に屠殺は終わるのかい？」

「屠殺を終わらせる方法は唯一つだニャン。世界を救う方法も唯一つだニャン。少女を殺す事だニャン。そしてそのチャンスは12月14日のお前がいつもウォーキングをしている公園でだけだニャン」

「だけど、？だけど、僕は女の子に告白も何もされていないぜ？」

「今年の夏、少女は公園で12才の誕生日に買ってもらったばかり

の子犬の散歩をしている途中で、ウォーキングをしているお前に目惚れしただニャン。だがお前はそんな少女に気付かなかっただニャン」

「公園で犬の散歩をしている女の子にかい？」

「そうだニャン」

「それで？」

「それだけだニャン」

「たったそれだけかい?!」

「たったそれだけで十分だニャン。少女が失恋するには、少女が世界に絶望するには、たったそれだけで十分だニャン」

「それじゃ、世の中の女の子が公園で犬の散歩をする度に屠殺が発生するじゃないか!」

猫はまた大きなあくびをした。そして、

「お前に12才の少女の心は理解出来ないだニャン」と繰り返した。

立っていられない。頭がクラクラする。顔から血の気が引いてゆくのか、頭に血がのぼってゆくのか、自分でもわからない。僕はやつとの思いで万年床に潜り込む。

もう今の自分が昨日までの自分とは違う事がわかっていて。純白だったキャンバスに真っ黒な絵具が塗られたのだ。

少なくとも今すぐ何かしなければいけないわけじゃない。14日までまだ日はある。今日は11日だから3日も残っているんだ。落ち着いて冷静にいつも通りの行動をしよう。

アイスコーヒーはたっぷりコップに残っている（僕は冬でもアイスコーヒーを飲むのだ）。

煙草を吸おう。

こないだ買ったばかりのCDを聴こう。

落ち着いて冷静にいつも通りの日常を楽しむんだ。

(次章に続く 最終更新日 11年07月11日)

### 第3章 12月12日

「少女を殺す事はお前の魂の救済にもなるだニャン」

「女の子を殺す事がどうして僕の魂の救済になるんだい?!」

「お前はそんな事もわからないのかだニャン。馬鹿に何を説明しても無駄だなだニャン」

猫は昨日と同じ様に、机に腰を掛けて足を組んで煙草を吸っている。

「お前は40歳の無職ニート童貞男だニャン」

「まだ39歳だよ」

「どつちでもいいだニャン。お前は10年以上働かずに親に食わせて貰って、お小遣いまで貰っている無職ニートだニャン」

「この不景気なんだから仕方ないだろ。僕だって採用されれば働くさ。だけど採用されないんだから仕方ないだろ。面接でどんなに好感触を得ても後日来るのは不採用通知ばかり。今だって仕事を探しているさ。ハローワークのインターネットサービスでね。シンプルな話さ!応募したい求人票が見つければ電話をする。上手くいけば面接してくれる。そして採用か不採用が決まる。僕は今まで全部不採用だっただけの話さ」

「お前は10年以上無職ニートなんだニャン。そんな奴を採用してくれる会社はどこにもないだニャン。つまりお前はこれから先死ぬまで無職ニートなんだニャン」

くそっ!ペラペラとよく喋る猫だな。ほんの数日前までは僕の万年床で一日中寝てばかりいたのに。丸めた体をポンと叩いたら「ウニヤ?!」としか言わなかったのに。

「お前は恋人もいないだニャン。10年以上無職ニートで貯金が一銭も無くて、親の年金で生きている男と結婚したい！だなんて女性はどこにもいないだニャン。つまりお前はこれから先死ぬまで童貞なんだニャン」

「僕は……一言で言えば孤独が好きなんだよ」やっこの思いで反論する。そして「僕はホモじゃないぞ！」と自分でも訳の分からぬ事を口にしていた。

猫は煙草の煙をふっーと天井に向けて吐き出した。

「お前も少しは人様の役に立つたらどうだニャン？」

「女の子を殺す事が人様の役に立つ事なのかい?!」

「放って置いたら屠殺はこれからも月に一度のペースで発生するだニャン。お前はそれでもいいのかだニャン？世界を救おうという気持ちにはならないのかだニャン？」

自分の正気を疑う。

猫を信じる？

この猫の姿は僕の幻覚だろうか？

この猫の声は僕の幻聴だろうか？

どちらにせよ心療内科で貰っている薬を増やしてもらった方がいいだろう。

布団の中で考える。一体1年前の自分はどこへ行ってしまったのだろうか？デジタル腕時計で今日の日付を確かめる。一体1年前の自分は何をしていたのだろうか？帰りたい。1年前の、1ヶ月前の、1週間前の自分でもいいから帰りたい。僕はどこまでもこの死んだ様な日々が続くと思っていたのだ。

女の子を殺したら一体どんな日々が待っているのだろうか？歯をくいしばらなければならぬ。警察は、マスコミは、裁判所は、刑

務所は、一体どんな目で僕を見るだろうか？

僕はもう考えるのを止めて暗闇の中へ、暗闇の中へ、潜り込む。人の心の中には覗き込んでも底の見えない井戸の様な暗闇が存在する事を僕は久し振りに実感する。

久し振り？

そうこの暗闇はかつて僕の住処でもあった場所だ。39年間生きてきた結果辿り着いた場所が結局ここか。僕は自嘲する。ああ、もう考えるのは止めだ。僕はもう思考を停止したいのだ。無へと回帰したいのだ。死にたいのだ。

(次章に続く 最終更新日11年07月11日)

## 第4章 12月13日

「少女を殺す時には露出魔の格好をすればいいだニャン。黒色のロングコートの下は素っ裸！というのが最高だニャン。そうすれば誰もお前の事を、変質者だ！と信じて疑わないだニャン。10年以上も家に閉じこもっていた無職ニートの中年おやじが少女を殺したとしても誰も疑問に思わないだニャン」

「ニヤニがニヤンだかわからないだニヤン」

「真似するなだニヤン」

「真似してないだニヤン」

「してるだニヤン」

「してないだニヤン」

「.....」

「.....」

僕は溜息をつきながら「だけど僕は黒色のロングコートなんて持っていないぜ？」

「安心しろだニヤン。吾輩がそこに用意しておいただニヤン」

猫の指差す方向を見ると部屋の隅に黒色のロングコートがきちんと畳まれて置いてあった。その上には鈍く光る包丁まで置いてあった。一体どこから持ってきたのだろうか？ほんの数分前までは僕の部屋にはそんなものは無かったのに。

試しに着てみたら僕のサイズにピッタリだった。足首まで隠れる露出魔御用達のロングコートといった趣きだ。左右に異様に大きなポケットが付いていて、猫が用意した包丁がスッポリと収まった。

「だけど12月にコート1枚じゃさすがに寒いだろう？」

「なんなら女子高生用のスクール水着も用意しようかだニヤン？」

僕はまた溜息をつきながら「その女の子はどうして僕なんかを好

きになったんだらうか？」

「お前がイケメンだからだニヤン」

「それだけかい？」

「それだけだニヤン。お前は人様並の苦勞もしてないから若く見えるしなだニヤン。少女が憐れだニヤン。少女は悪徳業者の飼育している食虫植物にだまされた可憐な蝶だニヤン」

「憐れだと思うのなら女の子を殺すのは止めないかい？神なら殺す以外にも解決方法があるんじゃないかい？」

「ないだニヤン」

僕はまたまた溜息をついた。

「さあ、これで準備万端整っただニヤン！明日はいよいよお前が世界の平和を守る為に少女を殺す日だニヤン！」そう言うと猫はガッツポーズをつくってみせた。

僕は以前からYouTubeで視聴していたブルース・スプリングステイーンの動画にアクセスした。ニートの楽しみといえばインターネットぐらいしかないのだ。

地元の若手バンドのステージに飛び入りで参加したという感じのブルース・スプリングステイーンの演奏はギターを弾くというよりは、ギターをかきむしると表現した方がピッタリだった。そう、テレキャスターをかきむしっていたのだ。

僕は以前からこの世にギターの音色ほど美しいものはないと思っていたが、テレキャスターの音色は好きになれなかった。ストラトキャスターやレス・ポールに比べて個性が有り過ぎるのだ。そして僕はその個性を好きになれなかった。

しかしブルース・スプリングステイーンの10分にも及ぶ「見張り塔からずっと」を何度も視聴しているうちにブルース・スプリングステイーンのテレキャスターの音色は、苦悩の、絶望の、音色だ

と理解した。ブルース・スプリングステインは苦悩や絶望を体現していた。

僕はその動画をmixiに貼り付け、簡単なコメントを添えて1月13日の日記として公開した。

(次章に続く 最終更新日11年07月11日)

第5章 12月14日

「女の子の連れてくる犬って、ドーベルマンや土佐犬じゃないだろうな？」

「心配するなだニヤン。お前でも勝てる小さな小さなチワワだニヤン」

猫は机に腰を掛けて足を組んで本を読んでいる。ゲーテの「若きウエルテルの悩み」だ。おもしろいかい？と訊くと「ユニークだニヤン」と答えやがった。この化け猫め。ゲーテもまさか自分の書いた本を、猫が読む日が来るとは想像もしなかっただろう。

母は朝から同窓会に出掛けている。今日は土曜日だから同窓生と一緒に温泉旅館に泊まり、明日帰ってくるらしい。

頭が、体が、しんどい。食事とトイレ以外は万年床から出る事が出来ない。寝たきりだ。それでもトイレはともかく、こんな時でも食欲だけは旺盛なのが自分でも恨めしい。道理でメタボになる訳だ。夜7時に夕食を済ませ、1時間程休んで、8時過ぎからウォーキングに出掛ける。これがいつものパターンだ。ただ今日だけは、全裸で、ポケットに包丁の入った黒色のロングコートだけをまもって出掛ける。ただ猫が言うから。

勿論僕には女の子を殺す気など毛頭無い。かといって「吾輩は神であるだニヤン」と言う猫に逆らう気力もない。ただいつものウォーキングの時間が来たから家を出ただけだ。継続は力なり。千里の道も一歩から。来年はメタボ検診が待っている。僕にとっては女の子を殺すよりもウォーキングが最優先すべき課題だ。

それでも僕は家を出て最後にもう一度だけと、我が家を振り返る。

近所の人々がみんな窓から僕を見ている様な気がするので、一瞬ちらつと振り返るだけだ。本当はいつまでも見ていたのだが、近所の人々から挙動不審と怪しまれる事を僕は恐れる。

その家は僕を安らかな眠りで包み込んでくれた。小学生の頃からの思い出が詰まっている、今の僕にとっては隠れ家の様な愛すべき存在。

僕の頭の中では「警察に捕まり死刑か無期懲役だニヤン」という猫の言葉が響いていた。

僕の家が失われてしまう。二度と戻ってくる事は出来ない。

公園に着くと、猫が言っていた通り女の子が一人で犬の散歩をしていた。女の子の服装の色や形は、前もって猫から教えられていた通りだった。女の子の連れている犬も、ドーベルマンや土佐犬ではなくチワワだった。女の子は足元の小犬に向って何か話し掛けていた。小犬の名前でも呼んでいるのだろう。

女の子は猫の言っていた通り普通の女の子に見えた。普通の田舎の女の子だ。

取り敢えず僕は女の子とは正反対の方向にあるトイレに向った。全裸にコート一枚だとさすがに寒い。まずは小便をしてそれから女の子の様子をそれとなく観察しよう。あの女の子が本当に屠殺を産み出したのだろうか？

しかし用を足してトイレから出た瞬間、僕は悲鳴を上げそうになった。女の子がそこに立っていたのだ。

「こんにちは」と女の子が言う。

僕も平静を装いつつ「こんにちは」と言う。

「あ、あれ？こんばんは。かな？あ、あれ？」

僕は平静を装いつつ「こんばんは」と言う。

「あ、そ、そうですね。こんばんは。ですよね。そ、そうですね」女の子はうつむいてウンウンとうなずいて一人で納得している。

女の子の連れている小犬は「ご主人様が話しかける相手なら安心だワン！」といった感じで無防備に興味深そうに僕を見る。

女の子は意を決した様に顔を上げると「あ、あのう、わ、私と一緒に散歩して下さい！」と言った。

え??? 僕の頭の中には猫の顔が5倍ズームアップで浮かんだ。

「い、いつもこの時間に散歩しているのを知っていました! い、いつもあなたの事を見ました!」

猫め! そんな事は何も言っただろ!

「よ、よかつたら、わ、私と一緒に散歩して下さい!」

女の子はまっすぐに訴えてくる。

「あ、で、でも私はストーカーじゃないですよ! あ、で、でも似たようなものかな? あ、あれ? どっちだろう? あ、あれ?」

女の子は頭は独りで、京都の哲学の道を歩き出したようだ。

僕は大きく息を吸い込んだ。僕に異論は無い! 女の子を殺すよりも一緒に散歩する方がよっぽどいい。猫が聞いたら激怒するかもしれないけど。

「いいですよ。OK! OK!」

僕は日本語の曖昧さを緩和する為に、女の子に英語で明確に意思表示する。

女の子は何故かウケたようで「おもしろい事言っんですね!」とクスクス笑い出した。箸が転がってもおもしろい年頃なのだろう。

「もつと怖い人かと思っていました! 安心しました!」

僕は笑う。

女の子も笑う。

女の子の連れている小犬まで笑った様な気がした。

僕は女の子の名前を聞いてなかった事を思い出して、女の子に名前を訊こうとした時、黒色のロングコートの間から、僕の息子が首を伸ばして顔を覗かせながら、世界に向かって「こんにちは!」をしていた。

リアルな、生身の、若い女性と久し振りに話が出来た僕は、嬉し

さと興奮のあまりいつの間にか勃起していたのだ。そして笑った瞬間に黒色のロングコートの前を塞いでいた手が緩んで……。世界に向って「こんにちは！」だ。

陰毛が風に揺れた。僕の息子は自分でも不思議なほど雄々しく勃起し、グロテスクな生き物に見えた。

女の子はそれを見て固まった。

そして何故か間違いなくポケットに入れていたはずの包丁が、乾いた音を立てて女の子の足元に転がり落ちた。女の子の連れていた小犬が驚いて後ろに飛び退いた。夜の公園の明る過ぎる照明を受けて、包丁はキラキラと輝いていた。

次の瞬間女の子は僕の目を哀願する様に見て、公園中に響き渡る大声で叫んだ。

「私から逃げて!!!」

僕は女の子のあまりの声の大きさにびっくりしたが、女の子の言っている意味が理解出来なかった。

「私から逃げてー!!!」

女の子はその場に頭を抱え座り込みながら更に絶叫する。

僕はその時ようやくわかった。ああ、僕は屠殺されるんだなと。

僕の頭のとっぺんから足の爪先まで体の内側で何か異変が起ころうとしていた。

僕の最大の罪は、自分で断罪せずに、女の子に審判を下させた事。

屠殺されるその刹那に猫の声が聞こえた。

「少女が大人になり結婚した時にだニャン、お前は少女の子供として生まれ変わるだニャン」

そして僕は数百数千の肉塊となり四方八方に飛散した。

(次章に続く 最終更新日11年07月11日)

## 第6章 地獄の番犬

目を醒ます僕。

「目が醒めたかいだニヤン？」

猫はいつものように机に腰を掛けて足を組んで煙草を吸っている。

「今日は一体何日だろう？」

僕は万年床の中から訊く。

「今日は12月14日だニヤン。時間は朝の6時30分だニヤン」

「あの女の子はどうしたんだい？」

「電車に飛び込んで死んだニヤン」

「え?!」

「少女は自分の命と引き換えに、お前を生き返らせる事だけを願って、電車に飛び込んで死んだニヤン」

僕は絶句した。

「少女の願いは叶えられただニヤン。お前は生き返っただニヤン。」  
猫はじつと僕の顔を見る。そして、

「少女が死んだから屠殺も消滅しただニヤン。もう屠殺は発生しないだニヤン」

と付け加えた。

自分の命と引き換えに僕を生き返らせただっけ？あの女の子が一体どれほどの想いで電車に飛び込んだかと思うと、僕は胸が一杯になった。あの女の子はまだ12才なんだぜ！

「世界は救われただニヤン」猫はそう言うつと煙草を灰皿に突っ込んで揉み消し、側に置いてあったゲーテの「若きウエルテルの悩み」をまた読みはじめた。僕は居ても立ってももられない気持ちで部屋を出た。猫は何も言わなかった。

僕は階下に降りる。リビングのソファに腰を掛け、台所で同窓会に出掛ける準備をしている母の後姿を眺める。もう60過ぎの母。母は以前からよく同窓会に出掛けていたけれど、仕事を定年退職してから更に出席する回数が増えたみたいだ。

僕は母の初恋について訊こうかと思う。だけどやっぱりやめる。訊いたところで何の意味も無いのだ。

僕は何気なく家の外へ出てみる。と、低い唸り声が聞こえた。犬だ。庭に犬が迷い込んでいる。

僕にはその犬が女の子の連れていた小犬である事がすぐにわかった。猫が言っていた通り僕でも勝てる様な小さな小さなチワワだ。

だがその小犬は女の子に連れられて公園で見た時の様な、茶色のサラサラとした美しい毛並みではなかった。全身に大量の返り血と返り肉を浴びた、生臭く生温かい異形の様相だった。そして何より目の色が違う。公園で見た時の様なあどけない目ではない。狂怒の目が、大量の返り血と返り肉を浴びた顔から覗いていた。

まるで地獄からの使者だ。

女の子の小犬は全身を震わせながら狂った様に吠え出した。それと同時に小犬の体に付着していた肉塊が、ズルリと小犬の体を伝い、ベチャリと音を立てて地面に落ちはじめた。

そして僕は女の子の小犬に吠えつかれたまま、身動き出来ずにその場に立ち尽くしていた。

地獄の番犬に取り憑かれたまま、

いつまでも

いつまでも

(完 最終更新日11年07月11日)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1371m/>

---

屠殺

2011年7月12日03時29分発行